

法持寺史関係略年表

川口高風

凡例

一、本年表は法持寺（名古屋市熱田区白鳥）草創以来、約一二〇〇年の変遷を編年的に編集したものである。

一、体裁は「日本暦」「西暦」「世代」「関係事項」の四項に分けた。「世代」は法持寺歴代の住持年間を実線で連ね、視覚上から一目できるようにした。ただし、住持年代が不確かな場合は点線で示した。

日本暦	西暦	世代	関係事項
天長年間	八三〇—八四一		弘法大師空海が熱田社（熱田神宮）に参籠したおり、白鳥陵に一小祠（法持寺の前身）を建立した。
建保五	一一三七		寒巖義尹は後鳥羽天皇、あるいは順徳天皇の第三皇子として京都北山に誕生した。
文永四	一一六七		義尹は入宋して帰国後、博多の聖福寺に留まる。
同六	一一六九		この頃、義尹は肥後の素妙尼の招きで如来寺を開く。
建治二	一一七六		義尹は母の菩提供養のために極楽寺を建立する。同年から弘安元年（一一七八）にかけて、九州で一番難所といわれた緑川に大渡橋を架けた。
弘安六	一一八三		義尹は河尻庄地頭の河尻泰明の外護を受けて、大渡に大梁山大慈寺を開いた。
正安二	一一〇〇		八月二十一日、義尹は如来寺へ移り、八十四歳で示寂した。
天授元	一一三五		華藏義曇が肥後で誕生した。（『日本洞上聯燈録』）
明德二	一一五一		正月七日、誓海義本は熱田社宮司尾張守田嶋仲宗の子として誕生する。
応永年中	一三四一—一四七		福重寺が建立され、その後に法持

日本暦	西暦	世 代	関 係 事 項
応永十	一四〇三		寺が建立された。「熱田地陵墓考」法持寺が曹洞宗として再興される。「張州雜誌」卷五十六）夏、誓海は発心し剃髪する。(略譜) 肥後の海蔵寺開祖梅巖義東に受業する。(略伝)
同十三	一四〇六		九月二十二日、華蔵義曇は海蔵寺において梅巖義東の法を嗣ぐ。(世譜)
同五	一四〇八		四月、義曇は海蔵寺に晋山開堂した。四月一日、明谷義光は熱田社宮司尾張守田嶋仲稻の子として誕生する。(略譜) (略伝) 千秋家の子と伝えるのは虚説という。(略譜)
同六	一四〇九		誓海は丹波の永沢寺の天真自性に参じた。(略伝)
同九	一四一三		誓海は越前の龍沢寺の梅山開本に参じた。(略伝)
同二六	一四一九		秋、誓海は肥後の海蔵寺の華蔵義曇に礼謁した。(略伝)
同二九	一四二三		春、誓海は薩摩の福昌寺の石屋真梁に謁する。(略伝) 三月五日、明谷は肥後の海蔵寺の義曇の下で剃髪し受具する。(履歴)
同三三	一四二六		春、明谷は越後の耕雲寺の傑堂能勝に謁する。

同三十四	一四二七		春、明谷は近江の洞寿院の如仲天間に参じた。(履歴) 四月八日、誓海は華蔵義曇の室に入り伝法衣を付属される。(略伝)
正長元	一四二八		華蔵義曇は梅巖義東の遺誡により海蔵寺を出て、山陽、山陰、五畿、南海の知識を歴訪した。
永享年中	一四二九—一四三〇		明谷は常安寺を開く。(世譜) 年末、誓海は普濟寺の室中にて義曇と師資面授する。(普濟寺文書)(統燈)
同四	一四三三		春、誓海は義曇に随つて遠州の普濟寺へ行き創建事業を行う。(略伝) 二月三日、良西大姉と銘のある五輪石塔の地輪が法持寺塔頭の月笑軒にあった。
同五	一四三三		秋、明谷は遠州普濟寺の義曇の下へ帰る。(履歴)
同六	一四三四		冬、義曇が普濟寺に晋院し、誓海が首座を務める。(履歴) 十月、寺号を広沢山普濟寺と改称し落成した。
同八	一四三六		秋、明谷は誓海に随従して尾州へもどり、円通寺の創建に尽力する。(略伝) (履歴)
同十	一四三六		四月十五日、誓海は田嶋氏の請に応じて円通寺に晋山開堂し第一祖となる。(略譜) (略伝)
同十一	一四三九		誓海は普濟寺の方丈において義曇の法を嗣ぐ。(世譜) 八月二十八日

日本暦	西暦	世 代	関 係 事 項
嘉吉年中	一四二一 一四二二 一四二三	-----	夜、明谷は誓海の室に入り伝法する。(略譜)(略伝)
宝徳元	一四四〇	開山 明谷義光	誓海が円通寺を開く。(世譜)(続燈)明谷は誓海の法を嗣ぐ。(世譜)春、明谷は常安寺を開創する。(履歴)明谷は法持寺を開き、福重寺も開山する。(世譜)
同三	一四五二	-----	春、誓海は勅詔によって円通寺を禳災道場とする。(略譜)(略伝)
康正元	一四五五	-----	誓海は普濟寺六世に就く。(世譜)二月、華藏義曇は予め東海へ行き、入定の時刻などの遺状を門弟に託した。二月十一日、義曇は普濟寺の運営を輪住形式とする遺言をのこした。四月一日、義曇は八十一歳で新豊院にて示寂した。七月二十八日、普濟寺は一年毎に住職を務める輪住制度をとった。
同二	一四五五	-----	秋、明谷は常安寺を悟峰に譲り、福重寺を創建する。(履歴)
文正元	一四六六	開山 明谷義光	春、明谷は福重寺を義曇に譲り、法持寺へ転住する。
応仁元	一四七七	-----	誓海は普濟寺に再住した。(世譜)正月五日夜、明谷の下へ白衣の神人が来参する。(履歴)十一月十六日、誓海は三尺坊に伝戒し羽休の
同二	一四八六	-----	

文明元	一四九〇	開山 明谷義光	神号を奉らる。(略譜)(略伝)誓海は後土御門帝より大明禪師の諡号を賜る。(略譜)(略伝)文明年中、法持寺が曹洞宗として再興される。(法持寺寺籍財産帳)
同二	一四九〇	-----	初秋、誓海は微恙を示したため明谷に円通寺を継がせ、八月八日に示寂した。(普濟寺文書)(世譜)(続燈)(略譜)(略伝)九月、明谷は円通寺に普院開堂した。(履歴)
同六	一四九四	維玄義中	二月、長楽寺は二世義山華嚴が真言宗であった寛蔵寺を再興し、明谷義光を請して中興の開祖とした。また、曹洞宗に改められ長楽寺と改称した。
同九	一四七七	-----	七月二十八日、久翁曇永が普濟寺に輪住した。
同三	一四八〇	-----	洞仙寺は玉泉玄珠が一字を建立して玉泉庵と称した。
同三	一四八二	-----	七月二十八日、明谷は、円通寺二世として普濟寺に輪住する。秋、明谷は頂相に自讃を加える。(法持寺旧蔵・福重寺旧蔵)
同四	一四八二	-----	十月十二日、開山明谷義光は世寿七十五歳で示寂した。(普濟寺文書)(世譜)(略譜)(履歴)示寂後、歴住三カ寺の住僧は靈夢を感じて寿像を三カ寺に安置する。(続燈)一説

日本暦	西暦	世代	関係事項
明応元	一四九二		では十二月十四日示寂とある。 七月一日、常安寺二世悟峯義(宗)徳は円通寺の輪住を務めた。十月一日、悟峯義(宗)得が示寂した。悦山慶忻が禅養寺の開基となった。九月十八日、二世維玄義中が示寂した。
同五	一四九六	三世	
同六	一四九七	月洲瑞香	
大永年中	一五二一 二七		月洲瑞香は香林宗萼が清須に開創した光明院の開山に勧請された。円通寺四世南齡牛誉は普濟寺に輪住した。(當山前任牒)
大永二	一五二三		八月、『広沢山普濟寺日用清規』が編集される。十二月十九日、長楽寺二世義山華嚴が示寂した。月洲は大悲山香樹院(大運寺)を開關する。
同七	一五二七		十二月九日、禅養寺開基の悦山慶忻が示寂した。円通寺五世天海孤舟は普濟寺に輪住した。(當山前任牒)
天文年中	一五三三 五四		香山潢公は法持寺塔頭の太虚院を創建する。
天文二	一五三三		四月二十三日、三世月洲瑞香が示寂した。
同五	一五三六		仙英良菊は清林寺の寺号を青林と改めて山号とし、寺号を延命寺と
同十	一五四一		
同十三	一五四四		
同十四	一五四五	四世 仙英良菊	
同十六	一五五七		改称して曹洞宗に改め開山した。天海孤舟が普濟寺に再住する。(當山前任牒)
弘治元	一五五五		法持寺塔頭の洗月院が創建される。仙英は東光寺を開創した。八月十日、四世仙英良菊が示寂した。
同三	一五五七	五世	
永禄元	一五六一 一五六	春沢祖豊	法持寺塔頭の高岩院が創建される。禅養寺は兵火に罹って堂宇を焼失し寺領も没収された。そのため仮本堂を建立して本尊を安置した。塔頭の梅萼院が創建される。
永禄年中	一五六九 一六		春沢祖豊は織田信長が清須城に居住していた頃、林昌寺の法堂を建立して本尊、脇士、四天王などを奉安した。
天正元	一五五二 一五七		六月二日、織田信長、本能寺で亡くなる。八月八日、平田山極楽寺(長禅寺)は織田信雄より黒印を賜り、開基とした。
天正年中	一五七二 九		普濟寺の輪住を円通寺代住として常安寺七世恩海祥君が務めた。
天正十	一五三二	六世	九月、春沢は浅井家文書(春沢讓状控)によれば、法持寺を大洋宗呑に譲っている。
同十二	一五三三	大洋宗呑	法持寺塔頭の月笑軒が創建される。三月二十八日、五世春沢祖豊が示寂した。
同十三	一五五五		鬼頭内匠義直が禅養寺の伽藍を再
同十五	一五七七		
同十六	一五八〇		
文禄年中	一五九一 九五		

日本暦	西暦	世代	関係事項
慶長三	一五九		興して中興開基となった。 林昌寺（宝昌寺）は入江夢庵（入江基右衛門）が開基となり春沢を開山へ迎えた。十月二十一日、大洋宗吞は正眼寺十三世天沢義恩より鐘を贈られる。
同三	一六〇八		普濟寺の輪住に円通寺代住として大洋宗吞が輪住する。
同三	一六〇七		天台宗の光明寺の末庵であった庚申堂（庚申寺）は、開基今井半左衛門によって創立される。
同五	一六二〇		正月二十六日、香樹院（大運寺）を創建し、太虚院の住持でもあった香山潢公が示寂した。十一月十三日、松平忠吉の家臣であった尾張衆五人の一人の中村元勝が逝去した。
同五	一六二四		十一月十九日、月峰慶吞の弟子林香が示寂した。
元和元	一六二五		正法寺は月峰慶吞が中興開山となり、法持寺の末寺になった。（「正法寺縁起」）
元和年間	一六二五 一六二一 一六二三		法持寺が火災に罹り、高見薬師堂も焼失した。

元和 寛永 元和二 同七 同八 寛永元 同三 同七 同九 同十 同十 同七 同九 同十 同七 正保四	一六五 一三 一六四 一六四 一六三 一六六 一六〇 一六三 一六三 一六三 一六三 一六四 一六三 一六四 一六〇 一六四 一六三 一六四 一六七	七世 嫩桂祖林	八世 月峰慶吞	初め頃、嫩桂祖林は春養寺の草創開山となった。 大洋宗吞は平田山極楽寺（長禪寺）を法地開基した。 嫩桂祖林は龍源寺の法地開山に迎えられた。（「尾張徇行記」）七月、嫩桂は円通寺代住として普濟寺に輪住した。 堀尾金助三十三回忌供養のために母が裁断橋の架け替えを行った。 月峰は橋の擬宝珠の銘文を書いた。 月峰は正法寺の伽藍を再建し、法脈を定めて伝法第一世になる。 嫩桂は春養寺へ隠棲した。 月峰は円通寺代住として普濟寺に輪住した。 正月五日、六世大洋宗吞は九十六歳で示寂した。八月七日、七世嫩桂祖林が示寂した。 法持寺で結制江湖会が行われた。 福重寺九世滅禪恩鎖は普濟寺に輪住した。 月峰は成福寺の法地開山になる。 秋より無能秀榎は円通寺独住三世になった。（「誓海和尚略譜」）
---	--	------------	------------	---

日本暦	西暦	世代	関係事項
慶安二	一六四九		常安寺八世五潤宗毅は普濟寺に輪住した。
同四	一六五二		鈴木正三の『因果物語』が刊行された。
承応年中 承応四	一六五三 一六五五	九世 大通快道	宝持寺は寺号を法持寺と替えた。 二月三日、八世月峰慶吞が示寂した。一説では二月二日示寂とある。 平田山極楽寺は無量山長禪寺と改号した。
寛文元	一六六一		白毫寺二世覚室禪海は円通寺代住として普濟寺に輪住した。
同七	一六七七		蜜伝心宗は玉泉庵を瑞雲山洞仙寺と改め、法地となして庫院を建立した。
同十	一六七〇		四月二日、林昌寺中興の一庭舟が示寂した。
延宝元	一六七三		円通寺六世玉葉は普濟寺に輪住した。
延宝年中	一六七三 一六八〇		副田勘左衛門が禪養寺の伽藍を再興し、中興開山に岳室宝積を迎えた。
延宝四	一六七六		七月十五日、空雲寺開基の鬼頭景義が逝去する。
同五	一六七七	十世 海岸義雲	正月十六日、九世大通快道が示寂した。一説では九月十六日示寂とある。
貞享二	一六五五		三月二十七日、芭蕉が林桐葉宅を訪ね、法持寺で詠う。
同三	一六六六		碧峰儀春は普濟寺に輪住した。
元禄年間	一六八〇 一七〇四	十一世 悦堂愚禪	悦堂愚禪が薬師如来（高見薬師）の堂宇を建立した。
元禄五	一六五二		九月十五日、十世海岸義雲が示寂した。一説では元禄三年（一六九〇）九月十五日示寂とある。
同六	一六五三		八月、龍玄寺七代目自喚が「尾州愛智郡諸根川郷山崎村梅林山龍玄禪寺之由来」（黄龍寺蔵）を記した。
同七	一六五四		七月、悦堂は法持寺境内の石燈籠の銘を記した。
同十	一六五七		八月三十日、円通寺六世玉葉耕雲が示寂した。
同十三	一六九〇	十二世 弘海義全	四月八日、薬師堂の堂主一播が「高見薬師」の縁起を記している。
同十三	一七〇〇		七月十日、大光院九世逸堂察応は法持寺の延命地藏菩薩像の輪光を寄進した。
宝永三	一七〇六		碧峰儀春は普濟寺に再住した。三月二十四日、十一世悦堂愚禪が示寂した。（玄猷寺安置位牌）一説では三月二十九日示寂とある。
			四月七日、善長寺（妙覚寺）の賞柳、永平寺に出世する。（永平寺前任牒）八月九日、輪山東叡が春養寺に借住して永平寺に出世し

日本暦	西暦	世代	関係事項
同五	一七〇八	十三世 輪山東叡	た。(永平寺前住牒) 夏、円通寺は大檀那田島仲頼より援助金を受けて仏殿、方丈、庫院、塔頭の陽谷軒、瑞用軒を復興した。円通寺九世興倫元苗は「円通寺記」を記した。
同六	一七〇九		八月三日、義山淳孝は洞仙寺に借住して永平寺に出世する。(永平寺前住牒)
同七	一七一〇		長楽寺二世石崖梁橋は普濟寺に輪住した。
正徳三	一七二三		六月、「白鳥町家並帳」がある。
同五	一七二五		義山淳孝は正法寺八世として伽藍の復興に努めた。
享保五八	一七〇一 一七〇二 一七〇三		八月、義山は正法寺の喚鐘の銘を記した。
享保八	一七三三		俯貫雄道が誕生した。
同九	一七三四		円通寺十一世安山観隆は普濟寺に輪住した。
同十	一七三五		弘海義全は東照庵を東昌庵と改号して中興した。(尾張徇行記)十一月四日、十二世弘海義全が示寂した。
同十二	一七三七		円通寺十三世光同峯日は普濟寺に輪住した。
元文二	一七三七		
同三	一七六六	十四世 義山淳孝	五月十三日、十三世輪山東叡が示寂した。一説では五月十五日示寂とある。
寛延二	一七四九	十五世 督宗淳董	円通寺十四世華山鼻龍は普濟寺に輪住した。
同四	一七五二		督宗淳董は義山淳孝の発願による大鐘を安置した。
宝暦二	一七五〇 一七五〇		塔頭の一雲院は無住であった。九月十八日、俯貫雄道は天徳院七世雷洲惟黙の室に入り法を嗣いだ。
同三	一七五三		七月、法持寺に鐘樓を建立する。
同四	一七五四		二月二十五日、雄道は全福寺(現在、麿寺)住持として大本山総持寺に出世する。
同六	一七五六		二月、龍源寺に同寺七世龍重旭泉が涅槃像を寄附している。七月二十一日、督宗は大瀬子町の御開山講へ道元禅師の画像を贈っている。
同七	一七五七		春、雷洲の法嗣の鉄馬天輪は龍玄寺(黄龍寺)を得る。三月、香樹院は吉田清左衛門が中興開基となり、義山淳孝を法地開山に迎えた。三月六日、十四世義山淳孝が示寂した。七月二十六日朝五ツ半時(午前九時頃)、門前の欠町より出火したため、法持寺は表門と鐘樓堂を残して全山を焼失した。
			東陽軒、無翁院、耕雲院は廃刹さ

日本暦	西暦	世	代	関	係	事	項
同八	一七五			了。			
同五	一七六			五月、黄龍寺は大光寂照を開山、雷洲を二世に勧請して、山崎徳左衛門の外護により法地再興される。(歴代古記)			
同三	一七六			円通寺十六世龍重旭泉は普濟寺に輪住した。三月二十三日、智翁淳哲は香樹院二世雄州亮契の法を嗣ぎ、三世に就いた。			
同二	一七五			龍重旭泉は普濟寺の儀規である『三足鼎儀軌』を著わした。			
明和元	一七四			八月、瑞雲山善長寺は、督宗淳董が法持寺檀徒岡本清七氏の援助を受けて荒廃した殿堂を一新し、法地となして本光山妙覚寺と改め、法持寺の末寺となった。十二月六日、指月慧印は西光寺(いわき市遠野町)で示寂した。			
同四	一七七			三月、智翁淳哲は香樹院(大運寺)の鐘堂の大鐘に銘を記した。			
同五	一七六			三月、妙覚寺二世周室淳鼎は妙覚寺の山門を建立した。			
				七月、鉄馬は黄龍寺を退隠する。			
				八月、雄道がその後董として黄龍寺四世に就いた。			
				八月二十八日、妙覚寺の鐘銘を淳			

同六	一七九			鼎が記した。			
同八	一七一			冬、雄道は黄龍寺の冬結制授戒会に鉄文道樹を戒師に迎えている。			
安永元	一七三			三月二十八日、光明院の法地開基の大通覚道が示寂した。六月、観光鳳洲と退歩玄妙が『鉄文樹和尚百則評頌』の編纂を行った。			
同二	一七三			栖林寺(駒ヶ根市東伊那)は冬安居結制で授戒会を修行した。戒師は鉄文が務めている。二月、光明院は督宗淳董を伝法第一祖に勧請して法地再興した。三月五日、新たに黄龍寺の仏殿、僧堂を創建することになり、上梁式が行われた。七月二十六日、雄道は授業師随流光順の十三回忌を修行している。			
同三	一七四			三月五日、黄龍寺の本堂が完成し、落慶法要などが行われた。九月、禅瑞は、龍潭寺の弟子の中から観音寺十一代目住職になった。(寛)			
同四	一七五			円通寺十六世龍重旭泉は普濟寺に再住した。三月二十五日、黄龍寺の庫院を新しく修造した。			
同五	一七六			五月二日、黄龍寺で開山大光寂照の五十回忌を務めた。			
				十一月三十日、法持寺境内にある			

日本暦	西暦	世代	関係事項
同六	一七六七	十六世 俯貫雄道	自若庵の句碑の銘。 八月□日より九月二十九日まで、高見薬師如来の開眼が行われ、夜には懸行灯がかけられた。 四月十五日、洞仙寺の蜜伝心宗が示寂した。 二月十二日、黙音雷喚が示寂した。十月十二日、開山明谷義光の三〇〇回忌を法持寺で厳修するところから、その疏を平田寺十二世龍靈瑞が作った。 十月二十八日、黄泉無著が八歳で雄道について剃髪し出家した。 二月、雄道は自題を付した頂相を弟子の大謙拙道に与えた。八月、退歩玄妙は龍潭寺十九世に就き、八月十九日に晋山している。
天明元	一八一	同二 一七六二	二月、雄道は「巨鐘銘並序」を記した。四月、督宗は法持寺を退董し、後席に俯貫雄道が就いた。十月二十四日、大運寺は香樹院より現在の山号、寺号に改められた。三月、雄道は中風を患う。退歩は法持寺十七世へ転住した。四月、大謙拙道が黄龍寺六世となる。 〔歴代古記〕五月、雄道は天徳院
同六	一七六六	十七世 退歩玄妙	
同三	一七六三	同三	
同二	一七六二	同二	
同五	一七六五	同五	
寛政元	一七九九	同七 一七六七	へ転住する。 龍重旭泉は普濟寺に三住した。法持寺は控山西方三十五坪を白鳥役所へ差出し、南方にその換地を給う。四月五日、俯塚洞外は天徳院の室中で俯貫雄道の法を嗣ぐ。四月九日、十六世俯貫雄道は天徳院において六十四歳で示寂した。八月、大謙拙道は長興寺十四世に転住した。九月、退歩は羅漢尊者像〔法持寺蔵〕に題す。 二月、大疑覚道は兄弟子の謙拙道の大謙拙道の後席を継ぐ。〔歴代古記〕三月十六日、督宗の弟子の妙覚寺三世活宗淳快が龍潭寺へ晋山した。七月十三日、薬師堂の堂守が托鉢している留守中、堂内の西側の障子が押しあけられて白米や賽銭、素麺が盗まれた。 督宗は自らの頂相に題を付した。塔頭一雲院の寺号を真言宗豊山派の地藏寺（一宮市本町通）へ譲った。 三月十一日、十五世督宗淳董が示寂した。一説では三月十三日示寂、八月十一日示寂、天明二年（一七八二）十二月十一日示寂とある。
同二	一七六〇	同二	

日本暦	西暦	世代	関係事項
同三	一七九二	十八世	二月、退歩は水谷法橋憬甫の画いた涅槃像を法持寺の常什具とした。提禅悦成が法持寺へ入寺する。また、『參同契・宝鏡三昧弁註』を書写する。
同六	一七九四	提禅悦成	二月九日、俯璨洞外は大本山総持寺に瑞世する。八月二十七日、十七世退歩玄妙が示寂した。円通寺十八世祖庭柏苗は普濟寺に輪住した。
同七	一七九五		六月、大謙拙道は永平寺蔵版『正法眼蔵』上梓にあたり、「大悟」の開板に金五両、銀三匁を寄附した。
同十一	一七九六		提禅悦成は長興寺十五世に転住した。六月二十八日、大謙拙道は長興寺より天祐寺へ転住する。九月十二日、雄道の法嗣の笑堂恵吟が示寂した。十一月頃から翌年にかけて、照山寛亮は観音寺を法地再興した。(六師村観音寺法地再興諸願達容 儀仙代)
同二	一八〇三	十九世	閏正月、禅瑞は観音寺を隠居した。(寛)六月九日、十九世大道貫宗が示寂した。七月、大疑覚道は法持寺二十世に転住した。
同三	一八〇三	二十世	大疑覚道

文化元	西暦
同二	一八〇五
同三	一八〇六
同四	一八〇七
同五	一八〇八
同六	一八〇九
同八	一八二二

八月、俯璨洞外は黄龍寺八世に転住する。八月二十八日、国穩道寧が生まれる。(松石寺壬申戸籍) 一月二十八日、鼎三が生まれる。(永平寺蔵「履歴書」十一月十一日、国穩道寧が生まれる。(高瀬慎吾筆写「明治三年九月許可戸籍」) 一月十日、鼎三が生まれる。(静岡県第二号曹洞宗務支局「僧侶現員調簿」九月下旬、高力種信が「熱田宮全圖」を描く。 三月五日、提宗元綱は全久院二十九世に就く。 十二月八日、黄泉無著は大疑覚道の室に入って法を嗣ぐ。 正月、俯璨洞外は黄龍寺本堂の磬子を新調する。夏、大疑覚道は法持寺で結制安居を修行する。八月二日、提禅悦成は大本山総持寺に出世する。(全久院二十九世提宗元綱よりの書簡) 八月十五日から翌年八月まで、提禅悦成は大本山総持寺如意庵に輪住した。九月、福重寺十九世一角雄麟代の開山忌疏(明谷義光)がある。十月二十日、悦成の法嗣の仙宗が大本山総持寺に出世する。(総持寺住山記) 十一月二十八日、寒江妙雪大姉

日本暦	西暦	世代	関係事項
同九	一八三	二十一世 俯璨洞外	(儀七妻、鼎三の実母)が亡くなる。円通寺十九世金重透鱗は普濟寺に輪住する。九月、双林寺より長興寺の提禅悦成へ会下の悦翁全瑞を来年夏、長興寺の首座に任命する旨が下される。
同十	一八三		三月、金龍寺八世大超徹道が観音寺に転住した。十月二十三日、尾張藩士で蔵書家の藤原克楨は「熱田宮全圖」を転写する。 四月二十五日、二十世大疑覚道が法持寺で六十三歳にて示寂した。 (黄龍寺過去帳) 俯璨洞外が法持寺住職に就く。五月、大謙拙道は俯璨洞外の後住として黄龍寺九世に住持した。 鼎三は俯璨洞外について剃髪した。(天籟餘韻) 二月八日、悦成の法嗣の天然が大本山総持寺に出世する。(総持寺住山記) 十月二十三日、大潜退承の授業師の大輪仙牛が示寂した。十二月五日、観音寺二世大超徹道が示寂した。 (観音寺過去帳) 三世には石雲禅虎が就いた。
同十一	一八四	二十二世 石雲禅虎	正月十三日、石雄恵玉は法持寺で
同十二	一八五		八月二十八日、国穂は神蔵寺八世雄賢興国について剃髪する。(高瀬慎吾筆写「明治三年九月許可戸籍」) 三月二十八日、大謙拙道が肥前の英俊院で示寂した。八月十五日、提宗元綱(全久院二十九世)が遷化した。 二月、大疑覚道の弟子の大中玉英は陽泉寺の堂宇を再興して法地とするにあたり、雄道を法地開山、大疑を二世に勧請し、自らは三世となった。九月、石雲禅虎は観音寺の山門を建立した。 字林萬喬は燈外禅燈を勧請して春養寺の法地開山とし、自らは二世となった。五月、石雲禅虎は観音寺に大鼓を寄附した。十一月、法持寺より『高王観音経附 <small>高王経縁啓白衣感応</small> 』が刊行された。 二月二十日、俯璨は法持寺境内に大乘妙典六十六部供養宝塔を建立して、銘を記した。 春、黄龍寺の道契の下に旃崖奕堂が参禅問法した。五月八日、長興寺十五世提禅悦成は豪徳寺二十一世に転住した。長興寺の後董には俯璨洞外が就いた。禅虎は洞外の
同十三	一八六	文政元	一八六
同六	一八三	同二	一八九
同四	一八三	同三	一八〇

日本暦	西暦	世代	関係事項
同七	一八四		<p>後董として法持寺二十二世に転住した。七月二十一日、石雄は成福寺住職として大本山総持寺に瑞世した。八月、塔頭の耕雲院は真宗大谷派の浄念寺（名古屋市中区丸の内）へ寺号を譲った。</p> <p>円通寺十九世金重透鱗は普濟寺に再住した。二月、石雄恵玉が志水町の大脇六兵衛より涅槃像一軸を成福寺に預かる。三月、證応道契は黄龍寺の由緒と菅原道真との関係を樋口好古が撰述し、岡田助太郎忠敬が書いた「紀山崎村黄龍寺中菅公祠之肇基碑」の建造主となった。六月二十三日、大潜退承は万松寺二十八世黄泉無著の室に入って法を嗣いだ。九月二十一日、俯璨は「長興寺入院披露」を双林寺へ出した。</p> <p>正月十八日、石雲禪虎は観音寺の庫裡（茅屋）を建立した。</p> <p>五月二日、如来教教祖きの（嬢姪院青室妙蓮大姉）が亡くなった。</p> <p>五月六日、葬儀。翌七日、火葬に付された。同月二十五日、大謙拙道が相州（相模）で示寂した。</p>
同八	一八五		
同九	一八六		
同十	一八七		<p>二月、大潜退承は観音寺の「仏涅槃像」を修補した。四月二十一日、陽泉寺三世大中玉英が示寂した。</p> <p>秋、大潜が観音寺位牌堂へ黄泉揮毫の額を掲げた。八月二十八日、大潜は黄泉の『永平高祖行状之図』双幅を檀越に勸募して観音寺什物とする。冬、禅養寺で結制が行われた。首座は岱宗が務めた。</p> <p>十一月十日、拙堂魯中は禅虎について得度した。（「観音寺過去帳」）</p> <p>十一月十四日、二十一世俯璨洞外が示寂する。一説では五月十七日示寂とある。</p> <p>二月、道契は『大蔵却鑰』を尾陽書林の慶雲堂より上梓した。七月五日、二十二世石雲禪虎が示寂した。大達玄中は先師石雲の頂相に贊を付した。夏、黄泉無著は皓台寺へ転住する。</p> <p>大潜は『正法眼蔵聴書抄』の凡例を記す。正月、大潜、皓台寺の鑑寺を務める。二月二十五、六日、黄泉無著は皓台寺住職繼目御礼のため参府の途中、法持寺に止宿、滞留する。三月二十日、黄泉は江戸に参じた。四月二十三日、黄泉は参府の帰り、法持寺へ立ち寄</p>
同十一	一八七		
同十二	一八八		
同十三	一八九		
同十四	一九〇		
同十五	一九一		
同十六	一九二		
同十七	一九三		
同十八	一九四		
同十九	一九五		
同二十	一九六		
同二十一	一九七		
同二十二	一九八		
同二十三	一九九		
同二十四	二〇〇		
同二十五	二〇一		
同二十六	二〇二		
同二十七	二〇三		
同二十八	二〇四		
同二十九	二〇五		
同三十	二〇六		
同三十一	二〇七		
同三十二	二〇八		
同三十三	二〇九		
同三十四	二一〇		
同三十五	二一一		
同三十六	二一二		
同三十七	二一三		
同三十八	二一四		
同三十九	二一五		
同四十	二一六		
同四十一	二一七		
同四十二	二一八		
同四十三	二一九		
同四十四	二二〇		
同四十五	二二一		
同四十六	二二二		
同四十七	二二三		
同四十八	二二四		
同四十九	二二五		
同五十	二二六		
同五十一	二二七		
同五十二	二二八		
同五十三	二二九		
同五十四	二三〇		
同五十五	二三一		
同五十六	二三二		
同五十七	二三三		
同五十八	二三四		
同五十九	二三五		
同六十	二三六		
同六十一	二三七		
同六十二	二三八		
同六十三	二三九		
同六十四	二四〇		
同六十五	二四一		
同六十六	二四二		
同六十七	二四三		
同六十八	二四四		
同六十九	二四五		
同七十	二四六		
同七十一	二四七		
同七十二	二四八		
同七十三	二四九		
同七十四	二五〇		
同七十五	二五一		
同七十六	二五二		
同七十七	二五三		
同七十八	二五四		
同七十九	二五五		
同八十	二五六		
同八十一	二五七		
同八十二	二五八		
同八十三	二五九		
同八十四	二六〇		
同八十五	二六一		
同八十六	二六二		
同八十七	二六三		
同八十八	二六四		
同八十九	二六五		
同九十	二六六		
同九十一	二六七		
同九十二	二六八		
同九十三	二六九		
同九十四	二七〇		
同九十五	二七一		
同九十六	二七二		
同九十七	二七三		
同九十八	二七四		
同九十九	二七五		
同百	二七六		

日本暦	西暦	世代	関係事項
天保元	一八〇〇	二十四世 大潜退承	る。六月、黄泉、鼎三書写の『正法眼蔵聴書抄』に序を記す。 二月十七日より三月二十八日の間に、国穂が寿徳寺二十二世となる。春三月、観音寺五世大達玄中代に十六善神尊像を新添する。七月、大潜退承は黄泉から「指月印公紅松子引」の軸を授与される。 二月二十三日、成福寺は留守居の達道が乱心で放火したため、堂宇を焼失した。 天祐寺衆寮にいた禅苗は、天祐寺住持であった石雄恵玉の下で得度した。(奉願上候御事)八月五日、一応喝三は大本山総持寺に瑞世した。八月二十四日、一応喝三が参内した。九月、石雄恵玉の頂相に弟子の喝三が皓台寺の黄泉無著に贊を需めた。十一月十四日、吹毛冷生が生まれる。
同二	一八三三		
同三	一八三三		
同四	一八三三		
同五	一八四四	二十五世 石雄恵玉	を贈る。十月、大潜は黄泉が補訂した『二十史反爾録』に跋を記した。 一月七日、大潜退承が示寂した。 春、風外本高が香積寺へ転住する。十一月十八日から二十四日迄、成福寺の授戒会に石雄恵玉が戒師に請された。 夏、鼎三は関浪磨瓢が提唱した『 <small>夾山</small> 破関撃節録聴書』を編集する。五月二十五日、證応道契は本興寺十八世に晋山した。八月十七日、十八世提禅悦成が示寂した。 十一月二十一日、狂歌師の田鶴丸が逝去したため、法持寺で追善法会を行った。 正月、国穂と鼎三は『仏遺教経』を刊行する。二月二十三日、鼎三は永平寺へ転衣の願上口上書を出した。二月二十四日、鼎三は永平寺に瑞世する。三月一日、鼎三は参内して繪旨を受ける。三月七日、道契の弟子鋏心玄鋸上座が示寂した。 黄泉の法嗣らが黄泉の寿塔を皓台寺に建立した。大潜は法持寺住持中に『正法眼蔵涉典統紹』の「袈裟功德」と「法華転法華」を校訂
同六	一八五五		
同七	一八六六		
同八	一八七七		

日本暦	西暦	世代	関係事項
同九	一八三六		四月十七日、皓台寺の黄泉は將軍代替拝礼及び朱印状改めのために参府する。途中、法持寺へ立ち寄る。九月二十四日、童拳天珠が誕生する。十二月十七日、黄泉無著が示寂した。
同十	一八三九		夏、道契は黄龍寺の門楣の扁を記している。九月九日朝六ツ時には、本興寺が罹災し堂宇を焼失した。
同十一	一八四〇		正月、延命寺二十一世徳翁頑童は開山の仙英の位牌を新しく造立し

同十三	一八四二	二十六世	白明は法持寺の一応喝三に随侍した。開基の熱田社大宮司千秋家が法持寺の塔頭洗月院より離檀し、神葬祭を行うことになった。国穂が大慈院に輪住する。また、大信道海(武州、龍穩寺)に代わって最乗寺にも輪住する。三月、黄泉無著、巨海東流、證応道契の詩偈をまとめた『江湖三絶集』が刊行された。六月、石雄は法持寺後住に一応喝三とする願を寺社奉行へ出した。七月二十九日、春養寺二世字林萬喬が示寂した。(春養寺過去帳)十一月、鼎三は観音寺を退院する。
同十三	一八四二		八月、道契代に本興寺の本堂が再建された。秋、国穂は先妣供養のため『妙法蓮華經安樂行品』を刊行する。
同十四	一八四三	二十七世 大達玄中	国穂は印宗正契(濃州、龍泰寺)に代わって最乗寺に輪住する。三月、秋葉寺十四世任柱泰礎が『観音懺法』の序を記した。八月二十七日、一応喝三は法持寺室中で洞然白明に三物を授けた。冬、一応喝三は法持寺を退隠した。(西光寺過去帳)

日本暦	西暦	世代	関係事項
弘化元	一八四四		国穂は龍光玉泉（小田原、海蔵寺）に代わって最乗寺に輪住する。国穂の下に畔上椽仙が随侍する。六月二十日、大達玄中の弟子の玄旨得中が示寂した。（黄龍寺過去帳）
同二	一八四五		国穂は滄海金龍（上州、雙林寺）に代わって最乗寺に輪住する。二月二十三日、石雄恵玉は仏海禹門へ伝法した。二月二十六日、大功德院宮（有栖川宮韶仁）が薨去された。
同三	一八四六		二月、道契は弘覚齋（未詳）が持参した自分の頂相に題を付した。三月二十九日、二十三世證応道契は本興寺において五十八歳で示寂した。十二月八日、大達玄中は「出山釈迦尊画像」を法持寺の什物とした。
同四	一八四七		一夢は法持寺任職であった玄中の弟子となり、堂宇を再建した。三月十九日、拙堂魯中は法持寺の室中で玄中の法を嗣いだ。（黄龍拙堂魯中禪師行状略伝『曹洞宗務局蔵（第一四号僧籍原簿）
嘉永元	一八四八		一月十二日、接航が黄龍寺の鼎三下で剃髪する。冬、国穂は松石寺
同二	一八四九		齋堂の魚鼓を什具とする。十一月、五代目沢村宗十郎は五代目沢村長十郎と改名した。円通寺二十二世勇進大猛（強）は普濟寺に輪住する。三月十四日、鼎三は白毫寺において十二世蔵一玄鷲二十三回忌、十四世宏椿玄亮七回忌の導師を務める。六月二十二日、鼎三は松音寺において二世梅菴逸枝忌明供養を行った。夏、鼎三は関貞寺戒会に助化する。石川素重が父とともに入戒加行する。四月八日、天珠は黄龍寺の鼎三下で剃髪する。五月十五日、石雄恵玉の頂相に禹門の請で般若林の覚巖実明が贊を記している。五月二十七日、大達玄中の下で少林得髓が得度した。六月七日、鼎三は長福寺四世晩器大成が示寂したため奠湯師を務める。
同三	一八五〇		春、冷生（宗本）は梵明円宗とともに黄龍寺の鼎三へ参随する。二月、道元禪師六〇〇回大遠忌にあたり、鈴木治左衛門が施主となって法持寺境内に宝篋印塔を建立した。四月、鼎三は松岩寺において高祖六〇〇回大遠忌予修法要を務める。五月二十五日、鼎三は
同四	一八五一		
同五	一八五二		

日本暦	西暦	世代	関係事項
安政元	一八五〇	同六	<p>伝法寺において高祖六〇〇回大遠忌予修法要を務める。七月十八日より二十四日迄、国穂は松石寺開山天巽慶順三五〇回忌法要並びに授戒会を修行し、鼎三は戒師を務める。八月二十一日より二十七日迄、鼎三は永平寺における高祖六〇〇回大遠忌に随喜する。九月、天珠は松石寺前住の国穂道寧に随侍した。日雇頭清治、同佐平治、柿屋甚兵衛、萬屋八左エ門らが施主となって水屋が建立され、大達玄中の記した銘（浄水）の彫られた手水鉢が寄進された。第五代沢村宗十郎は三代目助高屋高助の名を襲いだ。冬、冷生は鼎三下で宗本を冷生と改名し立身する。</p> <p>九月、三代目助高屋高助は名古屋へ赴き橋町芝居に出勤中、膈を病んで倒れ、十一月十五日に五十二歳で死去した。</p> <p>七月二十四日、玄中代に願主掛町の佐右衛門、甚兵衛、孫右衛門を始め、取持、同行中より石彫の地藏菩薩像が境内に建てられた。十一月四日、午前九時頃に大地震</p>

同二	一八五五	同四	同三	同五
		一八七〇	一八六六	一八六六

(安政地震) が起きる。				
二月二十五日、亨元貞道が誕生する。五月、一応喝三は龍泉寺の過去帳二冊を書写し直して什物とした。六月十二日、洽天等澍が大達玄中について得度した。十月二日、鼎三は喜運寺に安居して『永平大清規』を開演する。				
一応喝三は龍泉寺の本堂、御拝、玄関、山門に新しく木綿の幕を添えた。正月二十二日、大宮司秋季條は法持寺より離檀後に没した。八月二十五日、鼎三は大松寺で示衆する。九月、鼎三は『般若心経』を大書する。				
一応喝三は龍泉寺の玄関、庫裡などの普請に取り掛る。鉄地藏堂は小寺佐兵衛が堂宇を再興して法持寺の傘下に入る。八月、鼎三は林泉寺を法地へ昇格させて復興する。九月、国穂は施崖奕堂より龍海院後董に推挙される。九月、国穂は奕堂の天徳院晋山式に道旧疏を贈る。十月二十五日、鼎三は瑞雲寺戒会に助化する。				
二月一日、冷生は鼎三の室に入り嗣法する。三月六日、鼎三は光明院の戒会に助化する。三月十六				

日本暦	西暦	世代	関係事項
文久元	一八六一	二十八世 鼎三即一	日、鼎三は金剛寺の戒会に助化する。八月、冷生は清涼寺二十五世寂潭俊龍へ参学する。十一月十二日、鼎三は大松寺の戒会に助化する。冬、鼎三は安昌寺の戒会に助化する。 三月、月中一夢上座は嬭姪院供養の永代月供料及び茶湯料を法持寺へ納める。六月二十三日、二十五世石雄恵玉が天祐寺で七十三歳で示寂した。八月、玄中は中村氏奥方より施食修行の永代祠堂金十兩を受けた後、法持寺を退隠して正法寺の鑑住となった。九月、鼎三は黄龍寺山門を造営した後、法持寺へ転住する。秋、冷生は蔭涼寺の環溪密雲に参学する。 天珠は鼎三提唱の『鉄笛倒吹接嘴』を筆記する。夏、鼎三は法持寺の「首座寮施待定規」を定める。秋、證契慧印が鼎三に参随する。十月九日、信郷貞良居士（平野嘉兵衛貞良、貞道の祖父）が亡くなり、鼎三は秉炬師を務めた。 夏、天珠は光明院に安居し『碧巖集耳林鈔』を書写する。それに鼎
同六	一八六五		
元治元	一八六四	同三	三の序を受ける。樋口良歩が鼎三に参随する。 円通寺二十三世の英洲俊瑞が普濟寺に輪住した。四月八日、貞道は鼎三の下で剃髪する。五月八日、鼎三は東福寺の戒会に助化する。五月十七日、鼎三は西明寺の戒会に助化する。閏八月、鼎三は鉄地藏堂中興開基如々院月中一夢上座の下炬を行う。閏八月十一日、小寺佐兵衛（月中一夢上座）が六十六歳で亡くなる。閏八月二十八日、鼎三は研学聚螢居士書写の『観音普門品』の跋を記した。冬、冷生が福寿院九世に任職する。十月、鼎三は天祐寺三十五世仏海禹門の示寂に疏を贈る。 三月、良禪（不詳）は太虚院、高岩院の住持であった。九月、鉄地藏堂講中より法持寺へ嬭姪院供養の茶湯料二十兩を納める。九月二十四日、釈信帰庵主（大島勇八郎、天珠の実父）が亡くなる。 洞然白明は一応喝三を西光寺の法地開山に願った。三月、鼎三は蓮覚寺の戒会に助化する。四月、冷生は福寿院過去帳を改写する。 夏、鼎三、福王寺の戒会に助化す
同二	一八六二		

日本暦	西暦	世 代	関 係 事 項
慶 応 元	一八六五	同 二	<p>る。その際、福王寺二十世徳山義芳より『正法眼蔵私記』を譲り受ける。喝三の黄龍寺初会結制で、丘桃見が立職した。九月、嵩岳、法持寺冬安居の首座となる。法持寺へ俯貫雄道の予修法要に伝供される茶湯器が寄附された。冬、冷生は福寿院で法幢を建てる。首座は天珠。</p> <p>二月、鼎三は皓台寺衆寮の確伝を譲弟子とする。三月、鼎三は了玄院において、再興開山温州梅謙二十三回忌導師を務める。三月二日、天珠及び接航は鼎三の室に入り嗣法する。十一月、法持寺を始め六ヶ寺より正眼寺へ「御答旁指上申一札之事」を提出する。</p> <p>一月十日、慧等兼修が名古屋市富士塚町で誕生する。(愛知県第一号支局僧籍、法持寺「僧籍簿」)四月二十四日、浅野斧山が生まれる。五月、鼎三は建宗寺戒会に助化する。夏、冷生は尾張大納言よりの懇請に応じ、登城して禅門の玄妙を説話する。八月十九日、天珠は永平寺に瑞世する。冬、證契慧印</p>
同 三	一八六七	明 治 元	<p>は法持寺冬安居の首座となり、『天籟雜語録』を編集する。十二月、喝三の法嗣の大隆賢道は成願寺(南知多町)の法地再興を願い、開山に一道全英、二世は喝三、三世を賢道とした。十二月十日、喝三は洞然白明によって西光寺の法地開山に勧請された。</p> <p>正月十日、慧等は明達佐七の三男に誕生する。(『曹洞宗名鑑』)二月、鼎三は林昌寺法地再興開山の旨を寺社奉行所へ願上げる。花常村庄屋文蔵と林昌寺旦那方重吉は林昌寺法地再興の届を正眼寺へ提出する。二月二十四日、寺社奉行所と正眼寺より鼎三へ林昌寺再興開山及び法地許可の免状が申渡される。夏、大安実雄が法持寺夏安居の首座となる。五月二日、鼎三は両会取締の約定である「両会取締議定」を定める。六月八日、鼎三は宝蔵寺における開山江水春澄一五〇回忌を務める。</p> <p>二月、永平寺より新政府に対して、関東三箇寺の宗制撤去と永平寺を総本寺とする宗制改革案を出願する。三月、明治政府は神仏分離令を出す。六月六日、政府は永</p>

日本暦	西暦	世代	関係事項
同二	一八六九		<p>平寺に学寮を創立し、宗門制度に 関して碩徳会議を開催すべきを沙 汰する。また、総持寺に対して輪 住制を廃し独住制として、永平寺 に昇住すべきを命ずる。八月、白 鳥御陵の後の地六段二十八歩が法 持寺より分離されて、尾張藩の取 締りとなった。九月三日、政府は 永平寺に対し、碩徳会議の公達を 出した。九月二十八日、鼎三は碩 徳会議員として上京し、約三ヶ月 間滞在する。十月二日、宗門制度 碩徳会議が開かれる。十二月、永 平寺より法持寺へ常恒会が免牘さ れる。永平寺より黄龍寺へ片法幢 地が免牘される。</p> <p>正月十五日、正法寺において治天 等澍が法持寺前住職の玄中の室に 入り嗣法する。二月、尾張藩は再 び神領地調査を行う。五月七日、 神祇局寺社係より白鳥御陵が日本 武尊の山陵地と認められ、上地す べき旨が法持寺に通達された。</p> <p>夏、鼎三は永平寺西堂に就く。貞 道が永平寺に安居する。冬、鼎三 は正泉寺十五世金翎玄鳳の初法幢</p>
同五	一八七三		<p>会に賀偈を贈る。十二月、一応喝 三が黄龍寺の山門に新しい額を掛 けた。十二月二十日、政府は永平 寺と総持寺の本山を確認し、順位 は永平寺を上位となす。また、総 持寺の輪住制を廃止し、両寺の末 派相互に転住することを禁じた。</p> <p>鼎三は一月十二日に示寂した円通 寺二十三世英洲俊瑞茶毘式の奠湯 師を務める。七月二十五日、旃崖 突堂が総持寺独住一世となり、九 月二十二日に晋山祝国開堂式を挙 げた。国穩は道旧疏を贈る。九月、 林泉寺本堂の再建が始まる。十 月、鼎三は林泉寺本堂再建勸化帳 の「吉祥山林泉精舎再興化募」序 を記した。</p> <p>冷生は長生寺三十七世へ転住す る。五月、鼎三は永平寺貫首臥雲 童龍の後童候補者に推挙される。</p> <p>七月、政府は廃藩置県を行う。</p> <p>三月十四日、政府は教部省を設置 する。三月二十八日、永平寺と総 持寺の協和盟約が成る。四月八 日、慧等兼修は洗月院三世の天珠 について得度する。四月二十五 日、政府は十四階級の教導職を定 める。四月二十八日、「三條の教</p>
同四	一八七一		
同三	一八七〇		

日本暦	西暦	世 代	関 係 事 項
同六	一八七三		<p>則一が公布される。九月十六日、鼎三は大川重行らの質問書に弁駁する。冬、鼎三は万寿寺の戒会に助化する。</p> <p>一月十日、神仏合併大教院を麴町に開設する。二月三日、浜松県は秋葉寺の廃寺処置をとる。二月五日、大教院は増上寺へ移る。三月十七日、鼎三は大講義に補任せられる。また、教導職巡回説教師として愛知、浜松県など二大区を担当する。三月二十四日、浜松県は秋葉寺を秋葉神社と称することを布達する。三月二十六日、浜松県は可睡齋へ秋葉寺廃寺を示達する。四月、『三條辨解』『三條畧解』を刊行する。八月二十六日、鼎三は田中月璨とともに、愛知県下の報告を両本山東京出張所へ提出した。九月、秋葉寺法類と信徒は、秋葉寺の復寺再興を出願する。九月九日、二十七世大達玄中が示寂した。一説では七月十八日示寂とある。十月、冷生は山梨県管内十箇所教会長を囑託され、中講義となる。十一月、鼎三は道直克明、</p>

同七	一八七四		<p>持永真応の転衣推挙届などを両本山東京出張所へ出した。十一月五日、鼎三は田中月璨とともに改印届などを両本山監院へ届けた。十二月三十一日、大教院の神殿、大講堂などが焼失する。冬、貞道は鼎三下で立身する。</p> <p>一月七日、冷生は大講義に補任せられる。一月二十日、鼎三は珉山らの転衣届などを両本山東京出張所へ報告する。二月二日、角田忠行は教部省より熱田神宮の少宮司に補任せられた。二月十九日、臨濟、曹洞の宗名呼称が認可され、両宗各々に管長が設けられる。両本山東京出張所は曹洞宗務局、全国の録所は曹洞宗務支局と改称した。三月、角田忠行は千秋季福とともに『熱田神宮御神徳略記』を著わした。夏、慧等兼修は鼎三の常恒会結制に安居する。五月二日、貞道は鼎三の室に入り嗣法する。六月、鼎三は法持寺の「本堂並諸堂瓦葺替記録」の序を記した。六月二十四日、大蓮寺八世黙耕靈安が示寂したため、鼎三は茶毘設齋偈を贈る。七月二日、鼎三は愛知県下曹洞宗教導取締とな</p>
----	------	--	--

日本暦	西暦	世代	関係事項
同八	一八五		梅尊院は玄同圭宗が大達玄中を勧請して中興開山とし、本師の拙堂魯中を二世、自らは三世となって法地開闢している。牧野泰淳と土井漸治が鼎三に随侍する。五月三日、鼎三は青松寺内の曹洞宗宗内専門学本校設立資本金として、三十円を寄附する。五月十日、教部省は神仏各宗合併大教院を廃止する。八月二十一日、愛知県下の大光院を始め全国曹洞宗中教院が発表された。冬、黄龍寺結制で丘宗潭が入衆した。(『曹洞宗名鑑』)
同九	一八六		冷生は広徹院三十九世に転住する。六月、鼎三は法持寺本堂及び諸堂の瓦葺替寄附金の検査報告を行う。八月、梅尊院の過去帳によれば、当時は三世玄同圭宗であった。十二月、貞道は月笑軒に就職する。十二月二十日、鼎三は法持寺地検改正の入費金を確認する。栗木智堂が鼎三に随侍する。一月二十三日、鼎三は洗月院、月笑軒
同十	一八七		

同十一	一八六		よりの鎮金収納を確認する。一月三十一日、角田忠行は熱田神宮大宮司に補任せられる。六月、鼎三は法持寺日牌の「毎日靈供鑑」を改写する。八月五日、二十六世一応喝三が示寂した。一説では旧六月二十六日示寂とある。八月十七日、荒谷性顕が鼎三に参随する。十月、角田忠行は『熱田神宮略記』を著わした。十月二十日、曹洞宗務局より「祖師忌改正条例」が發布される。十月二十八日、鼎三は法持寺諸堂修造費の出入をまとめる。十一月五日、哲掃は鼎三の室に入り嗣法する。十一月十九日、貞道は永平寺に瑞世する。
同十二	一八六		七月七日、四代目助高屋高助の弟三代目沢村田之助が三十四歳にて亡くなった。七月二十八日、貞道の父泥江(文林貞章居士)が亡くなる。九月二十二日より、永平寺で懷辨禪師六〇〇回大遠忌が修行され、鼎三は教授師、接航は監院寮中書記、哲掃は教授師行者として随喜する。
同十三	一八七		冷生は山梨県下総務講長に任命される。二月、鼎三は『仏遺教経』を校訂し、栗田東平より刊行す

日本暦	西暦	世 代	関 係 事 項
同 吉	一八〇		<p>る。四月八日、斧山は天珠について得度する。五月三日、永平寺承陽殿及び孤雲閣などが火災に罹る。五月十六日、鼎三は『光明蔵三昧』出版届けを出す。五月二十六日、円福寺は鼎三を法地開山に勧請する。八月、鼎三は『光明蔵三昧』を「永平寺僧堂蔵版」として刊行する。八月二十四日、奕堂は山形県善宝寺にて示寂する。九月三日、国穩が発病する。九月六日午後二時、国穩が示寂した。九月二十五日、曹洞宗務局は「両本山貫首後董公選投票規程」を創定する。九月二十八日、曹洞宗務局より総持寺後董候補者に鼎三と冷生が推挙される。十月十八日、石川素童は永平寺副寺寮へ「光明蔵三昧清算書」を報告する。十一月十八日、静岡県令より秋葉寺再興許可が与えられ復寺する。十一月二十二日、道元禪師に承陽大師の諡号を賜わる。十二月、萊洲は観音寺の「承陽殿等再宮二付課金」を曹洞宗務局へ納める。</p> <p>二月、可睡齋と秋葉寺は復寺に合</p>

同 吉	一八一	二十九世 吹毛冷生	<p>意した上申書を曹洞宗務局へ提出する。三月十六日、鼎三は地藏堂中興開山となる。六月九日、可睡齋は「秋葉寺再興願二付盟約証」を広告する。六月三十日、秋葉寺法類等は「秋葉寺復旧願」を静岡県令へ提出する。十一月、冷生は宝林寺戒会に助化し、東光寺の過去帳の序を記した。十一月十日、鼎三は曹洞宗専門学支校の教師として加藤活龍（久岑寺二十三世）に卒業証書を出した。</p> <p>野田道環と田中は門が鼎三に随侍する。四月、鼎三は香積寺の戒会に助化する。四月頃、鼎三は秋葉寺へ転住する。冷生が法持寺住職となる。接航は秋葉寺役僧となり、復興に乗り出す。四月二十八日、可睡齋より秋葉寺へ本尊などを移す。七月、周智郡石切村の天野三四郎は秋葉寺へ磬子を寄贈する。八月、鼎三は秋葉寺へ入寺する。（秋葉寺保存普益会緒言）十月十八日、宮内省より秋葉寺へ「秋葉三尺坊大権現」額を下賜される。十一月六日、鼎三は秋葉寺の晋山式を行う。（天籟餘韻、鷹林香流への書簡）十一月七、八、九日、</p>
--------	-----	--------------	---

日本暦	西暦	世代	関係事項
同五	一八三		
			<p>鼎三は秋葉寺の上棟式を修行する。(「天籟餘韻」、鷹林香流への書簡) 十一月八日、鼎三の秋葉寺晋山式。(「秋葉寺開創縁由及復寺再興報告」) 十一月九、十日、鼎三は秋葉寺上棟式を修行する。(「秋葉寺開創縁由及復寺再興報告」)</p> <p>浅野斧山が鼎三に随侍する。一月十五日、接航は「秋葉寺開創縁由及復寺再興報告」を著わす。二月、鼎三は青井家過去帳の序を記した。四月十八日、鼎三は林昌寺へ秋葉三尺坊教会分社の秋葉講元取締、村上良音へ同講大社長を依頼する。六月十八日、鼎三は林昌寺へ秋葉講講元総取締及び秋葉寺教会出張所を依頼する。愛知県下教会総本社及び教会総取締も委任し、村上良音へ教会分社御膳講社長取締を依頼する。七月、鼎三は「秋葉寺再建講加盟簿」の緒言を記した。九月十八日、秋葉寺より林昌寺へ秋葉三尺坊真像一基が贈られる。十一月、鼎三は林昌寺に愛知講教会所を依頼し、村上良音へ愛知講取締社長及び火防講総取</p>

同六	一八三	三十世 童拳天珠	関係事項
			<p>縮を委任する。</p> <p>接航が秋葉寺の「本殿再建信心講化募緒言」を著わす。一月、鼎三は村上良音へ「教会依頼書」を出す。一月十六日、秋葉寺より林昌寺へ、秋葉教会結社派出のために秋葉三尺坊真像を授与する。一月十八日、鼎三は村上良音へ秋葉講社長総取締及び同講総取締、日出講社長、永寿講総取締を委任する。三月、鼎三は秋葉寺「幹化山林」の緒言を記す。三月一日より四月二十九日迄、秋葉寺開帳を修行する。(ただし、実際に修行されたかは疑問) 四月六日、冷生は法持寺の「境内其他什物等取調書」を記し、天珠に後席を譲る。冷生は慈照寺三十世に住職する。五月十日、永平寺貫首環溪は老衰のため退隠につき、後董候補者に鼎三と冷生が推挙される。五月二十一日、宮内省より秋葉寺へ秋葉寺本殿再建に付、金百円が下賜される。冬、慧等は天珠の結制で立職する。十月八日、忍衣妙信法尼(天珠の実母)が亡くなる。十月十九日、鼎三は尾張徳川家へ秋葉寺本殿再建の寄附を願う。十一</p>

日本暦	西暦	世 代	関 係 事 項
同 七	一八四		<p>月、鼎三と接航は上京する。十二月一日、鼎三は宮内省へ参内し、秋葉寺の御守や御札などを献納する。十二月二十九日、尾張徳川家より秋葉寺へ金十円などの寄附があった。</p> <p>一月、村上良音は「林昌寺縁起書」を記す。一月十七日、鼎三は村上良音へ火防祭式室中伝法を行い、「囑証」を与える。四月十四日、永平寺と総持寺より慈照寺へ常恒会を免贖される。五月、鼎三は『観音懺法』跋を記す。八月十一日、太政官は神仏教導職制を廃止する。八月より十一月頃、鼎三は秋葉寺を退隠する。十一月八日、冷生は鼎三の代理として誓願寺で秋葉三尺坊の説教を行う。十二月七日、環溪密雲が示寂した。</p> <p>三月、鼎三は『明治観音懺法』<small>治明新陳白</small>を三浦兼助より刊行する。三月二日、天珠は円通寺の竣工式に出席する。四月三日、鼎三は大光院で環溪密雲の報恩会が修行され疏を作る。五月五日、永平寺で環溪の茶毘式が修行され、冷</p>
同 六	一八五		

同 五	一八六		<p>生は僧堂単頭、接航は茶毘式係書記として随喜する。五月十八日、天珠は妙覚寺における旃崖奕堂七回忌、實參督全の五十回忌の香語を述べる。八月十日、永平寺貫首鐵肝雪鴻が示寂した。八月十八日、曹洞宗務局は永平寺後董候補者を発表し、鼎三と冷生が推挙される。八月、鼎三は山田大応編『増註六祖壇經』の題字を記した。九月十日、『光明蔵三昧』（永平寺僧堂蔵版）の版木を曹洞宗大学林専門学校へ寄付された。冬、浅野斧山は天珠の下で立身した。十一月二十六日、貞道が洗月院四世に住職する。</p> <p>一月、四代目助高屋高助は千歳座で興行中に胃病をおこした。二月二日午後九時頃、四代目助高屋高助が死去した。四月二十八、二十九日、永平寺で鐵肝雪鴻の茶毘式及び滝谷琢宗の晋山開堂式を行う。七月、鼎三は『参同契薰猶談』に書入れする。旧八月八日、天珠は円通寺の開祖忌に出席する。九月三十日、鼎三と接航は牧野泰淳へ「叢林行脚証明状」を呈する。十月二十七日、冷生は永平寺後堂</p>
--------	-----	--	---

日本暦	西暦	世代	関係事項
同 二二	一八九		
同 二二	一八六		
同 二二	一八七		
同 二三	一九一		
同 二五	一九二		
同 二五	一九九		
同 二五	一九九		

に特命され掛錫する。冬、天珠は源長院（梵明圓宗）の結制に助化する。十二月、円福寺住職一乗無参が来名し、鼎三を訪ねる。浅井泰山が鼎三に随侍する。一月、鼎三は『宝鏡三昧薰猶談』に書入れする。一月二日、鼎三は省己逸外へ書簡を出す。冬、天珠は祇園寺の結制に助化する。十月五日、慧等兼修は天珠の室に入り法を嗣いだ。

二月三日、慧等は月笑軒四世に住持した。三月、鼎三は鶉飼常樹編『首書 普勸坐禅儀坐禅用心記』に題辭を贈る。四月二十八日、慧等は永平寺に瑞世する。五月、冷生は『宏智禪師頌古接觜録』乾の序を記した。夏、貞道は洗月院で結制を修行する。八月、『宏智禪師頌古接觜録』乾が刊行される。十一月、天珠らは羽休達関の処罰に対する歎願書を曹洞宗務局へ提出する。

一月、鼎三は『仏遺教経』を矢野平兵衛より再刊する。上田正国が『常安寺世譜』を撰述する。三月、

鼎三は大達玄中の十七回忌を修行する。六月、『宏智禪師頌古接觜録』坤が刊行される。九月十五日、鼎三は村上良音が勸募する「大般若化益簿」に序を記した。十月三日、洞仙寺九世無関禅透が示寂したため、鼎三は秉炬師となる。十月八日、鼎三は大光院で行われた尾張、三河両国水災横死群霊の水陸会に出席する。十月二十二日、鼎三は梅村萬助（積善道慶居士）の下炬を務める。十月三十一日、冷生は永平寺後堂を退任する。十一月三日、斧山は天珠の室に入り嗣法する。

二月一日、冷生は永平寺特命により静岡、愛知両県の巡教派出員となる。二月二十四日、鼎三は『碧巖録』を講演する。貞道が筆記して『碧巖集接觜録』とする。春、冷生は山梨県曹洞宗務支局教導取締となる。十一月三日、光山義明が中村区岩塚町字新屋敷で誕生する。

四月一日、冷生は永平寺監院に特命され、同月十日に永平寺に掛錫する。四月三十日、永平寺貫首滝谷琢宗が退董する。五月一日、斧

日本暦	西暦	世代	関係事項
同 二五	一八五二		<p>山は永平寺に出世する。五月二十八日、曹洞宗務局は永平寺後董候補者を発表し、鼎三、冷生、接航らが推挙される。九月、鼎三は笠間龍跳の『般若心経平談』に題辞を贈る。十月二十八日、濃尾大震災が起こり、法持寺本堂、開山堂、玄関などを破損する。正法寺、延命寺の本堂も倒壊した。十一月二十八日、鼎三は野口氏の浄財による震災没故者供養の甘露無遮会で、香語を述べる。十二月十二日、慧等は延命寺二十七世に住職する。十二月十六日、天珠は龍心寺の戒会に助化する。十二月二十四日、鼎三は牧野泰淳へ書簡を出す。金宝山林昌寺は秋葉山宝昌寺と改称した。三月十九日、総持寺貫首畔上模仙は管長の権限を以て、随意両本山分離独立の達書を發布した。そして両山盟約の無効を永平寺に通じ、曹洞宗務本支局を廃止して曹洞宗議会の消滅を告げ、且つ内務大臣に曹洞宗宗制の取消と両本山分離の請願を発表した。五月、鼎三は広厳院住職鷹林香流へ</p>

同 二六	一八五三		<p>「回向疏」「檀上礼」などを書写して贈る。九月二十七日、鼎三は成福寺で修行された青井家先祖供養歎仏会の導師を務める。十月一日、天珠は法持寺の「<small>（震災）</small>寄附簿」緒言を記した。十月二十五日、天珠は興聖寺住職西野石梁へ道旧疏を贈る。十一月、鼎三は病床に臥した。十一月二十八日午前十時、二十八世鼎三即一が示寂した。三月二十三日、斧山は天年寺十六世に住職する。五月十四日、天珠は正法寺二十三世徳有東隣が示寂したため、茶毘式の乗炬師となる。五月三十一日、金宝山林昌寺より秋葉山宝昌寺への改寺届を出す。八月、天珠は生家の大島家過去帳を改写して序を記した。八月、天珠は永平寺後堂に特命される。九月二十七日、天珠は永平寺の高祖承陽忌の午時焼香師を務める。十一月、拙堂魯中は鼎三の一周年香語を述べる。十一月二十二日、正法寺の本堂、開山堂などが再建されて遷仏式を行った。十二月十二日、天珠は久雲寺の戒会に助化する。十二月二十一日、貞道は宝泉寺十三世に特命される。</p>
---------	------	--	---

日本暦	同 二七
西暦	一八六四
世 代	
関 係 事 項	<p>三月、『天籟餘韻』が刊行される。三月十三日、慧等は洗月院五世に任職した。夏、貞道は宝泉寺で結制を修行する。九月三十日、天珠は永平寺後堂が満期となり、法持寺へ帰山する。十一月五日、一心寺十四世月定愛光が示寂したため、天珠は奠湯師となる。(無依餘稿) 十二月十七日、永平寺貫首森田悟由は両本山分離紛議の責任を感じ、任職の退任を曹洞宗務局へ通達する。十二月三十一日、曹洞宗務局は「曹洞宗非常法規」に準じて森田悟由を永平寺貫首、畔上棟仙を総持寺貫首に特選する。四月二十日、冷生は福井県訓令により永平寺の伽藍、什物などの取調事項を提出する。五月十六日、春養寺八世哲玄亮周が示寂したため、天珠は拳鑿師となる。五月二十八日、永平寺において森田悟由の晋山式を行う。冷生は監院兼晋山式総轄、接航は晋山係、天珠は単頭として随喜する。六月、貞道は宝泉寺の「講会連名簿」の緒言を記す。六月二十一日、冷生は永</p>

同
二九

一八六六

平寺において故有栖川宮殿下及び征清戦死病没者追吊会の導師を務める。七月十五日、冷生は森田悟由の「御晋山式礼願末並金穀出納精算」を全国末派寺院へ報告する。十月九日、冷生は「慈照寺由緒及財産取調書」を作成する。十一月二日、内務大臣の認可を得て、「曹洞宗非常法規」が廃止される。

二月十五日、天珠は吉田義道へ「叢林行脚証明状」を出す。五月六日、天珠は妙覚寺の戒会に助化する。法持寺僧堂の雲衲三十余名が随喜する。六月二十八日、天珠は全隆寺で行われた岩手、宮城、青森各県溺死者無遮会に出席する。八月八日、冷生は永平寺東京出張所執事、曹洞宗務局定時及臨時教師検定会検定委員長、第二護法会臨時総轄に任ぜられる。八月十五日、貞道は宝泉寺を退院し、管天寺三十世特命住職になる。十月二十日、第四次曹洞宗議会が開かれ、冷生は越本山東京出張所執事として出席する。十二月十五日、曹洞宗務局は法持寺の曹洞宗認可僧堂を許可する。十二月十九

日本暦	西暦	世代	関係事項
同 三十一	一八九七		日、天珠は長盛院の戒会に助化する。十二月二十一日、冷生は曹洞宗務局紀綱寮寮司、副司の改選に立会いする。 慧等は曹洞宗准師家となる。一月三十一日、滝谷琢宗が示寂した。三月二十五日、冷生は老衰により各公職を辞任する。三月中旬、慧等は濃尾震災によって倒壊した延命寺本堂再建の勸募文を記し、寄附を募った。六月十日、普濟寺は山門と衆寮を除き灰燼に帰した。なお、靈廟は無事であった。九月二十六日、永平寺において琢宗の荼毘式を行う。十月二十一日、天珠は法持寺の「上地山林引戻申請書」を農商務大臣大隈重信へ提出する。十一月二日、冷生は慈照寺僧堂を開単する。
同 三十二	一九九		一月、天珠は病床に臥す。一月二十八日、二十九世吹毛冷生が示寂した。一月二十九日、永平寺貫首森田悟由より冷生へ本山西堂位が贈られる。 十一月、福寿寺の佐藤大孝は道元禪師六五〇回大遠忌にあたり、そ
同 三十三	一九〇〇		の報恩行として江湖会を開き、西堂に慧等が招聘されて授戒会の戒師を務めた。 十二月、三橋徹宗は『現行社寺法規摘要 仏教各宗派宗制大全』を刊行する。十二月二十五日、畔上棟仙は老衰のため総持寺を退董し、後董候補者に接航推挙される。投票の結果は、天珠が一票を得る。 四月十八日より永平寺で道元禪師六五〇回大遠忌が修行される。四月二十一日、天珠はその法要導師を務める。八月八日、浅野斧山が曹洞宗大学林教授に任命される。春、慧等が両本山巡回布教師に任命され、新潟県地方を巡回した。四月、熱田社宮司角田忠行と権宮司松岡義男らによって、陵上に「白鳥御陵」の碑が建てられた。 十二月二十八日、天珠は法持寺の「諸堂宮繕出納記録」を記した。 春、奥行六間、横八間の延命寺本堂及び開山堂を新築した。一月、鷹林香流と河内嶺道は冷生の七回忌に真影へ森田悟由の贊をもとめる。二月十日、天珠は法持寺を貞道に譲り、洗月院へ退隠する。三月十日、『新編 観音懺法』を京都
同 三十四	一九〇一		
同 三十五	一九〇二		
同 三十六	一九〇三		
同 三十七	一九〇四		
同 三十八	一九〇五		
同 三十九	一九〇六		
同 四十	一九〇七		
同 四十一	一九〇八		
同 四十二	一九〇九		
同 四十三	一九一〇		
同 四十四	一九一〇	三十二世 亨元貞道	

日本暦	西暦	世代	関係事項
同 三六	一九〇五		の松柏堂出雲寺文治郎より再刊する。三月二十八日、天珠は福寿院徒弟中村信義へ「法持寺認可僧堂安居証明状」を出す。四月二十二日、三十世童拳天珠が示寂した。六月二十七日、義明は明達慧等について出家剃髪する。八月二十八日、慧等は延命寺の諸堂を復興する。貞道は野口吉十郎へ延命寺再興の功による「中興開基免牘」を贈る。九月十三日、釈貞寿禅尼（貞道の実母）が亡くなる。（法持寺過去帳）九月、斧山が管天寺三十一世に住職する。十二月二十日、貞道は村上良音へ宝昌寺の「中興免牘」を贈る。
同 三九	一九〇六		四月、大本山総持寺貫首に最乗寺住職石川素童が就任する。その後、慧等は石川素童の随行長を務める。
同 四一	一九〇七		法持寺は公認の曹洞宗認可僧堂となる。四月十六日より法持寺で授戒会を修行する。また、天珠の三回忌も併修された。十月十四日、西来寺において鼎三の十七回忌予修法要と接航の斎忌
同 四二	一九〇八		が営弁された。一月、斧山が祇園寺二十二世に住職する。二月十五日、貞道は法持寺より国分寺三十三世へ転住する。三月十四日、慧等は法持寺三十二世に就いた。四月二十六日、貞道が国分寺三十三世の晋山式を行う。七月二十六日、法持寺で愛知県曹洞宗寺院による練習艦隊松島艦殉難者各英霊の供養が行われ、石川素童が親化した。十月、三橋徹宗は大泉寺において天珠の七回忌予修法要を修行する。
同 四三	一九〇九		六月十六日、慧等が曹洞宗師家に任命される。十月二十六日、貞道は曹洞宗務局へ「国分寺干与者住所資格氏名印鑑届」を提出する。普濟寺の本堂と庫裡が再建された。森田悟由は冷生の十三回忌香語を述べた。冬、義明は法持寺で立身した。
同 四四	一九一〇		四月から義明は大本山総持寺祖院に掛搭した。六月、斧山は『東卓全集』を刊行する。七月十六日、斧山は最勝院四十三世に転住した。十一月、斧山は一喝社より『禅病論』を刊行する。十一月五日、慧等は総持寺の遷祖移転式に随喜

日本暦	西暦	世代	関係事項
同 四五	一九二三		した。 二月八日、義明は慧等の室に入つて嗣法する。六月一日、浅野斧山が示寂した。七月十日、得応全瑞禅尼(天珠の実姉)が亡くなる。七月十日、三十一世亨元貞道が示寂する。
大正 二	一九一三		大森禅戒は大塚洞外に冷生の真影を画かせ、森田悟由の賛をもとめる。八月、法持寺夏安居の首座は村橋明道であった。十月二日より八日迄、法持寺で授戒会修行。十月七日、鼎三と冷生の年忌、天珠の十三回忌法要を行う。
同 三	一九一四		二月二十六日、慧等は姓を明達から山田と改姓した。(宗報「第四三七号、四三八号」)六月三日、慧等は曹洞宗議会議員に特選される。
同 六	一九一七		八月二十五日、諦観高明が誕生する。九月二十九日、義明は延命寺二十九世に首先住職する。
同 七	一九一八		四月二十八日、義明は曹洞宗大学宣教部の一人として大本山総持寺の日曜公演の弁士となった。六月十日、慧等が福井県坂井郡雄島村宿拾八字桑畑七番ノ壹地の既設建

同 八	一九二〇		物を法持寺説教所とする設置願を曹洞宗務局庶務部長と福井県知事へ出した。十二月二十日、西垣活通は天珠を十一世に勧請し、林泉寺の常恒会免贖を受ける。
同 九	一九二〇		義明は慶寿院十二世に転住する。一月一日、栗木智堂は曹洞宗務院総務に任ぜられる。
同 十	一九二二		白鳥山別院の執事であった三浦大心は慧光院二世に就き、教化活動に努めた。十月十二日、貞道は対馬市の延命寺の中興開山に勧請される。
同 十一	一九二二		三月二十二日、慧等は中川区江松にある秋葉社の守護堂の仙寿庵を千葉県市原郡富山村大字古敷谷にあつた寺籍を移転して常盤寺とし、寺籍移転開山に勧請された。
同 十二	一九二二		七月八日、天年寺は山門を除いて全山を焼失し、同十四年に再建された。八月、慧等は私財を投じて法持寺認可僧堂内に小学生以上の園生五十名を募集し、中学規定の普通学と宗乗、余乗の専門学を研鑽する白鳥学園を開設した。(宗報「第六一五号、〔中外日報〕九月、国穂と鼎三が校訂した『仏遺教経』(天保版)が京都の永田文昌堂

日本暦	西暦	世代	関係事項
昭和 三	一九六		
同 十二	一九三		より再刊される。 慧等は私財を投じて熱田女学校を設立する。三月三日、義明は真珠院四十二世に転住する。
同 十三	一九四		秋、三浦大心は慧光院の仮本堂を建立し、解脱上人作の釈迦如来像を本尊にして天白吒枳尼天を鎮守とし祀った。
同 十四	一九五		一月、慧等は白鳥慈善講を組織して講主となった。
同 十五	一九六		二月十七日、法持寺講堂にて、小松原同乗、木下月影、宮坂喆宗らを招聘して仏教講演会が開催され聴衆で満室となった。(名古屋市仏教会要覧) 三月、白鳥山説教所を愛知郡天白村大字野並字相生二十八番地ノ十一に設置する「教会所設置願」が設立者兼管理人三浦大心より愛知県知事へ提出された。
同 十六	一九七		六月一日、法持寺は曹洞宗専門僧堂に指定される。六月十七日、林松寺二十二世服部正男の晋山結制及び授戒会の西堂、戒師を慧等が務める。七月十五日、法持寺専門僧堂が開設された。(白鳥山記録、「教師養成機関ニ関スル調査表」)
同 四	一九元		一月十五日、高明は真珠院四十二世川口義明について得度する。
同 五	一九〇		二月、慧等は養泉寺専門僧堂の師家となる。
同 八	一九三		一月十七日、法持寺安居僧及び関係者によって白鳥凌雲会が結成され、慧等がその総裁となった。
同 九	一九四		四月二十四日、慧光院二世三浦大心は晋山式を行い、翌日より授戒会を厳修した。十月、大名古屋八十八ヶ所霊場が選定され、法持寺は第五十六番霊場となった。
同 十	一九五		四月二十六日、慧等は管長の諮問機関として設けられた宗機顧問所の顧問に任命された。(宗報一第 九一〇号) 七月四、五日、義明は宗務院樓上で開かれた最初の曹洞宗師家会議に出席する。(天法輪新聞)
同 十三	一九八		十二月三十日、高明は川口義明の室に入って法を嗣ぐ。
同 十五	一九〇		八月十五日午前四時、三十二世慧等兼修が七十三歳で遷化した。八月十七日、慧等の密葬が行われ、九月十七日午後二時より本葬が行われた。十一月十八日、義明が法持寺三十三世の法燈を継承する。
同 十六	一九一		十一月二十四日、高明は大本山永
光山義明 三十三世			

日本暦	西暦	世	代	関係事項
同 二五	一九四〇			平寺に瑞世する。 義明は法持寺夏安居で初会結制を修行する。
同 二六	一九四一			三月二十五日、義明は曹洞宗師家に任命される。六月十日、高明は大本山総持寺に瑞世する。
同 二七	一九四二			四月二十五日、義明は大本山永平寺報恩授戒会の午時焼香師を務める。九月、山岡荘八は法持寺へ来山した折、庭に多くの藪柑子が茂っていた様子を歌う。
同 二八	一九四五			三月十一日、天年寺が空襲によって焼失した。三月十二日、洞仙寺が夜間空襲によって諸堂宇を焼失した。五月十七日、未明の午前〇時四十分頃、約百機のB二十九が来襲し、法持寺は全山が灰燼に帰した。十一月二十二日、高明は曹洞宗務院に設置された曹洞宗振興会の書記に就いた。
同 二九	一九四六			一月、義明は名古屋市が建てた戦災復興住宅を購入して寺の事務所とした。二月二十八日、鉄地蔵堂は宗教法人令により「如来宗」を標榜して法人となる。
同 三〇	一九四七			五月三日、熱田神宮の管理下に

同 三一	一九四八			あつた白鳥御陵は、戦災復興都市計画により名古屋市へ供出した。
同 三二	一九四九			十二月、義明は六十四坪の仮本堂、庫裡を建立して本堂再建に務める。
同 三三	一九五〇			一月十四日、法持寺境内が宮中学校の建設地に決定した。三月十六日、大徹高風が誕生する。四月、義明は愛知県知事と名古屋市長へ陳情書を出す。
同 三四	一九五〇			十二月、法持寺の墓石が名古屋市千種区の平和公園へ移転される。
同 三五	一九五〇			七月五日、鉄地蔵堂、宗教法人法によって宗教法人嬬婁院と称し、法持寺より離末した。
同 三六	一九五〇			七月二十九日、高明は成福寺九世に首先任職し、冬安居結制江湖会を修行した。
同 三七	一九五〇			五月一日、法持寺は現在地へ移転して落慶移転入仏式が行われた。
同 三八	一九五〇			十月、高明はスライドの「木の芽茶屋」を愛知県第一曹洞宗務所より発行する。
同 三九	一九五〇			五月二十六日、法持寺に慧等の随徒が集まり、白鳥慈恩会を結成した。
同 四〇	一九五〇			十二月八日、高風は成福寺九世川口高明について得度する。
同 四一	一九五〇			十月十四日、義明は大本山総持寺

日本暦	西暦	世代	関係事項
同 四十二	一九六六	三十四世 諦観高明	御忌会で御両尊献供諷経の焼香師を務める。
同 四十一	一九六五		十一月二日、三十三世光山義明が享年七十七歳で示寂した。十一月二十四日、高明は法持寺三十四世の法燈を継ぐ。
同 四十三	一九六七		冬、高風は川口高明の下で立身する。
同 四十三	一九六八		二月二十四日、高風は川口高明の室に入って嗣法した。
同 四十九	一九七四		七月二十二日、大関北の湖関が史上最年少の二十一歳二カ月で第五十五代横綱に推挙されたため、その伝達式が法持寺本堂で行われた。
同 五十五	一九八〇		六月三日、高明は延命寺の兼務住職に就く。
同 五十六	一九八一		八月から翌年十一月頃迄に天年寺の庫裡、書院、開山堂が完成した。
同 五十七	一九八二		六月、高風は『白鳥鼎三和尚研究』を第一書房より刊行した。
同 五十八	一九八三		二月二日、高明は慧光院の兼務住職に就く。
同 五十九	一九八四		七月、横綱北の湖関が名古屋場所
同 六十	一九八五		で八百勝の新記録を達成した。 一月、高明は旧本堂、庫裡などの解体に着工した。三月三十日に地
同 六十一	一九八六		鎮式を行って庫裡（書院）の再建が始まった。九月二十九日、高明は東京の国技館で行われた横綱北の湖関の引退断髪式に招かれ、髻にハサミを入れた。
同 六十二	一九八七		二月、本堂の再建工事が始まった。
同 六十三	一九八八		一月二十七日、高風は慧光院五世に就く。四月、山門、弘法堂、水屋、塀、境内整備が始まる。
同 六十四	一九八九		四月三十日、新伽藍が竣工した。
同 六十五	一九九〇		十月三十日、落慶式が営まれた。
同 六十六	一九九一		十一月十九日、高明は空雲寺の兼務住職を務める。
同 六十七	一九九二		六月九日、高風は延命寺と常盤寺の兼務住職に就いた。
同 六十八	一九九三		夏安居、高風は慧光院で初会結制を修行する。七月二十五日、北の湖親方が日本相撲協会理事長に就任した時の挨拶の記念碑が法持寺境内に建立された。
同 六十九	一九九四		五月十一日、高明は法持寺を退董し慧光院へ隠棲する。高風は法持寺三十五世に就き、十月三十一日に晋山結制を修行し、『明治期以後の法持寺史』を記念出版した。
同 七十	一九九七		四月十三日、高風は大本山総持寺報恩授戒会において焼香師を務める。
同 七十一	二〇〇七		三十五世 大徹高風

日本暦	同 二十一
西暦	二〇〇九
世 代	
関 係 事 項	三月二日午後七時四十分、三十四世諦観高明が享年九十三歳で示寂した。三月五日に密葬、三月三十日に本葬を修行した。四月二十六日、高風は大本山永平寺報恩授戒会において焼香師を務める。 三月、高風は『熱田白鳥山法持寺史』を刊行する。
同 二五	二〇一三